

ベーツ資料の翻訳

― 高等学部長として、院長として、学長として ―

池田 裕子

I. はじめに

一九一〇年九月、関西学院神学校教授として、C・J・L・ベーツ (Cornelius John Lighthall Bates, 1877-1963) が着任した。カナダのメソヂスト教会が関西学院の経営に参画し、初めて派遣した宣教師の一人だった。⁽¹⁾ ベーツは、一九一二年から一七年まで初代高等学部長、一九二〇年から四〇年まで第四代院長、一九三二年から四〇年まで初代学長 (院長兼任) を務めた。昨年の当紀要では、関西学院を離れてからベーツが書いた回想録二編を翻訳したが、今回は現役時代のベーツのメッセージを取り上げたい。高等部長時代、院長時代、学長時代に発表された中から、もっとも印象的な次の三点を選んだ。

1. 講演論説 "OUR COLLEGE MOTTO, 'MASTERY FOR SERVICE.'" 関西学院商科会報

『商光』第一号、一九一五年二月、三―五頁。

2. “FROM MY OFFICE WINDOW,” 『関西学院学生会時報』第一卷第二号、一九二二年六月二十八日、一頁。

3. “THE MISSION OF K. G. UNIVERSITY,” 『関西学院新聞』大学昇格祝賀号、一九三二年二月二〇日、四頁。

一点目は、関西学院のモットー “Mastery for Service” について、ベーツが語った「講演論説」である。これまで、英文のまま、あるいは日本語に翻訳され（部分的翻訳を含む）、さまざまな機会に紹介されて来た。⁽²⁾ 翻訳文を目にすると、その時々々の翻訳者の思いが強く反映されているように感じられる。初代高等学部長として、高等学部のためにベーツが提唱した “Mastery for Service” は、いつしか関西学院全体のモットーになった。そのきっかけは、ベーツの院長就任（一九二〇年一〇月）であつたと考えられる。その後、校歌「空の翼」の歌詞に使われた（一九三三年）⁽³⁾ こともあり、在学生、卒業生を問わず、関西学院関係者の間で、この言葉の認知度は極めて高い。翻訳に当たり、個人的思い入れが強くなるのは避けられないことなのかも知れない。しかし、一九一五年二月時点のベーツは弱冠三七歳である。この言葉が実際に高等学部のモットーとして提唱されたのは、それよりさらに遡り、一九一二年度中のことであつたと考えられている。⁽⁴⁾ 二点目は、院長就任から二年弱のベーツが学院新聞に発表した言葉である。まるで絵筆で描かれたようなメッセージで、院長室の窓からの景色が鮮やかに浮かぶ。趣味で絵を描いていたベーツの感性が伝わる一文だ。⁽⁵⁾ この時、ベーツは四五歳だった。一九一七年三月に関西学院を離れて

いたが、一九二〇年四月の理事会でJ・C・C・ニュートンの後任となる第四代院長に選出された。その知らせをカナダのオタワで受けたベーツは日本に戻り、同年一〇月一五日、院長就任式が行われた。⁽⁶⁾ベーツの言葉が掲載された『関西学院学生会時報』は、現在の関西学院大学新聞総部が発行する『関西学院新聞』の前身である。残念なことに、一九二二年五月三〇日発行とされる創刊号は残っていない。⁽⁷⁾この一九二二年六月二八日発行の第一巻第二号が現存する最古の学院新聞である。

三点目は、関西学院が念願の大学開設を果たし、初代学長（院長と兼任）に就任したベーツが学院新聞に発表した言葉である。この時、ベーツは五五歳になっていた。関西学院で初めて大学開設の話が出てから一八年、大学令が制定され、大学設置が帝国大学以外にも認められるようになってから一四年の年月を経て、ようやく念願の大学開設が実現したのである。高等学部学生会が長年、大学昇格運動に取り組んできたことをベーツは熟知していた。関西学院が創立の地原田の森を離れ、上ヶ原に移転したのはこのためであった。ベーツの脳裏には多くの教え子や関係者の顔が浮かんだことだろう。これまでの歩みを振り返り、支えてくれた人びとに感謝しつつ、新たな一歩を踏み出すベーツの決意表明と言える。前年の満州事変勃発により戦時体制に突入し、協調外交が崩壊した時代背景を考えると、そのリベラルな内容に驚かされる。

これら三点の翻訳に当たり、私がつとも留意したのはベーツの年齢である。繰り返しになるが、一点目は三七歳、二点目は四五歳、三点目は五五歳の時の言葉である。それぞれの年齢に合った日本語にしたいと思った。⁽⁸⁾それは、ベーツの背景、その時点までにベーツが経験した出来事や出会いを振り返る作業でもある。

II. 講演論説⁽⁹⁾ 高等学部⁽¹⁰⁾のモットー “Mastery for Service”⁽¹¹⁾

人には二つの側面があります。一つは個人的、私的側面、もう一つは公的、社会的側面です。人にはそれぞれ一人で生きるべき生があり、そこには誰も立ち入ることができません。それが私的な個人の生です。しかし、人の生はそれだけではありません。他人と分かち合うもう一つの側面があります。これら二つの側面を念頭に置くことが私たちの義務です。それぞれの側面に応じた生の理想があります。一つは自己修養、もう一つは自己犠牲です。両者は相反するものではなく、補い合うものです。いずれも、片方のみでは完結せず、他方と無関係ではありません。自己修養のための自己修養は利己的になります。自己犠牲だけを人生の規範にすると軟弱になります。しかし、自己犠牲に基づく自己修養は理にかなっているだけでなく、必要不可欠です。こうした土台があつて、自己犠牲は真の効果を發揮するのです。

人が生まれながらに持つこの二つの側面が高等学部のモットー “Mastery for Service” に含まれています。私たちは、臆病者であることを望みません。私たちは、強くあること、マスター（主人）であることをめざします。知のマスター、チャンスのマスター、自分自身の、欲望の、野心の、食欲の、所有物のマスターです。私たちは、他人や環境や自分自身の感情のサーバント（しもべ）にはなりません。私たちの mastery の目的が個人を富ませることであつてはなりません。社会奉仕のためでなければなりません。イギリスでは、公務員が国民のサーバントと呼ばれ、最高位の者は国のミニスター（身を小さくして人に尽すしもべ）⁽¹²⁾と呼ばれています。その責務は命ずることではなく、奉仕することです。はつきり言うと、社会にどれほど奉仕したかによつて

のみ、人の偉大さがわかるのです。

ですから、強く、役立つ人になることが高等学部の理想です。弱く無能な人になることではありません。マスターと認められる人になることです。マスターとなって、得意がったり、自分自身を豊かにしようとするのではなく、私たちが生きてきた世界をより良くするため、人類に有益な奉仕をしたいと願うのです。

私たちが理想とするビジネスマンは、賭博師でも守銭奴でもありません。マスターであるがゆえに成功する人、ビジネスの基本原理を理解している人、なすべきことを知っている人、コツコツと正直に働くことで、ほかの人なら失敗しかねない場面を成功に導く人です。銀行の預金残高を増やすことだけを人生の目的にするのではなく、社会状況をより良くするために自分の財力を使う人、公共心があり、社会的責務に敏感な人。このようなビジネスマンは従業員に愛され、顧客の信頼を得るでしょう。

私たちが理想とする学徒は、吸い込むばかりで、絞られるまで決して放出することのない知識のスポンジのようなものではありません。自分自身、ましてや自己の名声のためではなく、人類に奉仕するために知識を身に付けたいと強く望むのが理想の学徒です。

「人として生まれ、大工として死す」と墓碑に刻まれることがあると聞きます。⁽¹³⁾ そんな結末を私たちは望みません。そのような終わり方は失敗です。「商人として死す」、「大金持ちとして死す」、「政治家として死す」と書かれたとしても、まったく成功とは言えません。人となること、マスターになること、と同時に人類の真のしもべとなることが私たちの理想なのです。

Dean C. J. L. Bates, M. A., "OUR COLLEGE MOTTO, 'MASTERY FOR SERVICE.'"

Ⅲ・院長室の窓から⁽¹⁴⁾

院長室⁽¹⁵⁾の窓から曲がりくねった道が見えます。その道は関西学院の中心部 (heart) から入口 (entrance) まじ⁽¹⁶⁾続いていて、ほとんど門まで見渡せます。さらに、高等商業学部事務室⁽¹⁷⁾、チャペルの角⁽¹⁸⁾、神学部⁽¹⁹⁾の裏口が見えます。

曲がりくねった道を通って、毎朝、何百人もの青少年、中学部生、高等学部生が登校してきます。⁽²⁰⁾ 彼らは日本の希望です。それに交じって、カナディアン・アカデミー⁽²¹⁾に通う外国の少女少女の姿もあります。その多くは「日本生まれの外国人」です。大多数が過去百年の間に、世界の果てまで到達したアングロサクソン文明の周縁にいるイギリス人とアメリカ人で、宣教師やビジネスマンの子どもたちです。

関西学院は、世界各地からさまざまな人が集まる、実に国際的な中心です。目と心と頭を開いていれば、ここで暮らすこと、ここで教えること、ここで学ぶことは特別な恩恵だと私は思います。窓の正面は古い神社の杜です。⁽²²⁾ 三百年間、神道崇拜の中心だったと言われています。安らぎと静寂に満ちた美しい楽園です。街がこの杜を枯らしていると言われます。空気を汚し、煙を出し、騒音が鳥を追いかうので、巨木が虫の餌食になっています。そのような中、新たな木が育ち始めています。新しい命は誰の目にも明らかです。神社の古い杜の周りに、関西学院の新しい校舎が次々に建てられています。見事な新旧対比です。

神社の杜の東には、弓道場で学生が矢を射るのが見えます。⁽²³⁾ 弓道は実に素晴らしい日本古来のスポーツです。汚れなく、凜としていて、確かな的、自制心、精神修養、腕力が求められます。

確固たる目標に向かって自分自身を奮い立たせ、一直線に的を射抜くことを若者に教えます。ですから、日本古来のスポーツの中でもっとも素晴らしいものの一つだと私は思います。未来に残し、奨励する価値のあるものです。私たちは古の生活のもっともよい部分を大切にして、後世に伝えていかねばなりません。日本は興味深く長い歴史を持つ偉大な国です。その偉大さと先人が成し遂げてきたことを、進歩の過程で決して忘れないようにしましょう。

遠くに目をやると、窓から街が見えます。製鉄所、港、さらに、その向こうには遙かに広がる海。⁽²⁴⁾

新旧、現実と理想、善悪、生死、関西学院はそれらすべての中心にいます。

私たちの手で、関西学院を生と光と力の中心にしましょう。⁽²⁵⁾ そうしようと思えば、私たちにはそれができるのです。

C. J. L. Bates, "FROM MY OFFICE WINDOW."

IV. 関西学院大学のミッション⁽²⁶⁾

一九三二年は、日本帝国政府から大学開設の認可が与えられた年として、関西学院関係者の間で永遠に記憶される年になるでしょう。⁽²⁷⁾

長年にわたり、私たちはその実現を願い、祈り、計画して参りました。⁽²⁸⁾

それは学校にとって必然の運命だったように思われます。まず中学部、次に高等学部。それぞれ開設から二〇年かけて基礎が据えられ、関西学院における教育の根本方針が定まりました。⁽²⁹⁾

今、さらなる発展に向け、新たな一步を踏み出す準備が整ったように思われます。「沖に漕ぎ出そう」⁽³⁰⁾。この一步の重みを十分認識しています。大学を開設し、運営するのは容易なことではありません。私たちの目標を実現し、ミッションを達成するには、全学生、教職員、卒業生、支援者の誠意ある心からの協力がが必要です。

関西学院は二つの意味でミッションスクールです。第一に、ミッション（伝道局）によって創立された学校であること、第二にミッション（使命）を持った学校であること。関西学院を「学校のひとつ」、関西学院大学を「大学のひとつ」と考え、満足してはなりません。私たちの大学を単に学びの場とするだけでは不十分です。もっとも深い意味で、教育の中心としなければなりません。

英語の“Education”という単語は、二つのラテン語からできています。“e”あるいは“ex”は「～から」、「duco」は「導く」を意味します。この意味において、Educationは、学生が生まれながらに持っている才能を導き出すことです。その目的は、学生が自分の考えを持ち、自分の言葉で語れるようにするためです。進取の精神と自信と自制心を育てるためです。ある種の能力の単なる訓練ではないのです。

私たちのミッションは人をつくることです。純粋な心の人、芯の強い人、鋭い洞察力を持った人、真理と義務に忠実な人、嘘偽りのない誠意とゆるぎない信念を持つ人、寛大な人です。

この中で、私は「寛大さ」(magnanimity)を究極の理想にしたいと思います。それは、魂のもっとも崇高な姿です。これこそ、関西学院の学生および卒業生の理想であり、そのような人をつくりだすことが関西学院大学の偉大なるミッションなのです。

このミッションを達成することにより、私たちは社会と日本の国に最高の奉仕をすることになるでしょう。

C. J. L. Bates, "THE MISSION OF K. G. UNIVERSITY."

V.
おわりに

ベーツの高等部長時代、院長時代、学長時代を代表するメッセージをその背景と共に見直してきた。最後に、関西学院のモットー“Mastery for Service”の日本語訳について、述べておきたい。

今回、“Mastery for Service”を英語のまま残した。しかし、この言葉は、「奉仕のための練達」という日本語が付記されることも多い。現時点で確認されている限り、この訳語が初めて用いられたのは、文部次官からの照会文「貴校ニ於ケル教育振作ノ具体的方策及ソノ所見承知致度ニ付……」（一九三九年五月一七日付）に対する高等商業学校長（神崎驥一）の返書である。同じ内容の照会文に、専門部長名（C・J・L・ベーツ）で「：関西学院ノ伝統的標語『マスタリー、フォア、サーヴィス』ハ……」と回答しているのに対し、高等商業学校長は「：関西学院ノ伝統的標語『奉仕ノ為ニ練達セリ』ハ……」と、モットーを日本語に訳して回答している。その背景には、「時局的判断」があったと推測されている。⁽³¹⁾しかし、この訳語は戦争が終わっても使用され続けたため、多くの人にとって、“Mastery for Service”＝「奉仕のための練達」として定着してしまった。

“Mastery for Service”を提唱したベーツ自身が、この言葉を日本語に置き換えて学生に語ったことはなかったであろう。“Mastery”の意味、“Service”の意味、さらに、両語を“for”で

結んだ時の緊張感、それらを表す簡潔な日本語は存在するだろうか。

学生時代のゼミの時間、私たちの拙い英文和訳を聞かされ続けた商学部の中村巳喜人先生は、静かにこうおっしゃった。「関西学院には、体育会の標語として『Noble Stubbornness』という言葉があります。『高貴なる粘り』と日本語に訳されているようですが、それで意味がわかりますか？ そんなの翻訳ではありません。日本語になっていません。あなただったら、『Noble Stubbornness』をどう訳しますか？」もちろん、ゼミ生は誰も答えられず、沈黙するしかなかった。「私なら『気骨』と訳します。こんなにも短く、こんなにも相応しい日本語は、ほかにないでしょう」。

“Noble Stubbornness” が「気骨」なら、“Mastery for Service” はどう表現すべきだろう。中村先生にお尋ねしたいが、既に先生は神のもとに召されてしまった。いつの日か、“Mastery for Service” に相応しい簡潔な日本語（漢字の組み合わせ）が見つかるかもしれない。ベーツが愛読していたテニスンやブラウニングの中にその手がかりがありそうな予感がする。⁽³²⁾ それまで、この言葉は英語のままにしておきたいと私は思う。

【注】

(1) カナダ・メソヂスト教会から関西学院に派遣された宣教師は二名。もう一人はD・R・マツケンジーだった。

(2) 翻訳例として一般に知られているのは次の通り。『関西学院史七十年史』、一九五九年、八九〜九〇頁。新井節男『関西学院健やかな歴史…心とからだの教育その流れと近未来像』、一九八九年、二七〜三三頁。『輝く自由 関西学院その精神と理想 The Spirit of Kwansei』、二〇一六年、七〜八頁。

- (3) 在学生におけるスクールモットーの理解度調査によると、「説明できる」と「少し説明できる」を合わせて七六・九%であった(『われわれの大学をよりよく理解するために』(KIII)―第一八回(二〇一四年)カレッジ・コミュニティ調査基本報告書―、関西学院大学教務機構高等教育推進センター二〇一五年三月、五六―五七頁)。また、卒業生に対する「スクールモットーへの意識」調査では、「常に行動の規範としている」、「頻繁に意識している」、「時々意識する」を合わせると八四・〇%であった(『第三回(二〇一一年度)関西学院大学卒業生調査報告書』、関西学院大学高等教育推進センター、二〇一二年三月、二七―二九頁)。
- (4) 辻学「校訓 Mastery for Service と『ベーツ文書』」『関西学院史紀要』第二二号、二〇〇六年、九―一〇頁。
- (5) ベーツは、風景画を描くのが好きだったようだ。油彩画、水彩画、パステル画を残している。キャンパスでイーゼルを立て、絵を描くベーツとそれを見守る学生を撮影した写真もある。「当時中学部を卒業して、東京の本郷研究所に絵を修行に行つてゐた私、中学部を卒業して同志社に行つてゐた坂野君等が『エフカイテモカマイマセン』と云ふベーツさんのお言葉に甘へて再びノコノコと原田の森に帰り、高商部の二回生として入学させてもらつたのです」と書いた卒業生もいる(神原浩「落第を目前にメキシコへ逃避した三人男」『関西学院高等商業学部同窓会会報』第二〇号、一九三七年九月五二頁)。
- (6) ベーツの院長選出の過程については、池田裕子「J・C・C・ニュートン第三代院長の足跡を訪ねる」『関西学院史紀要』、二〇〇三年、一九四―一九九頁、池田裕子「お気の毒トリオがゆく」『K.G. TODAY』No. 287、二〇一五年四月、一三三頁。
- (7) 「学院新聞の前身たる学生会時報の第一号が出たのは大正十一年五月三十日、当時の学生会学芸部長大石兵太郎兄を編集責任者として、われわれ同人がこれに加わった」(塩見恒明「学生会時報のこと」、『関西学院新聞部四十年』、関西学院新聞縦の会、一九六三年、三頁)。

(8) ベーツの死後、教え子たちによる座談会が行われた。その時、恩師のことを寿岳文章は「非常にかしこい人だった」と言い、今田恵は「そう。しかし若いときにはそれが少し目についたところがあったね」と受け、河辺満麿は「それは年をとるにつれて自分がそれを反省しておられた」と語った。「だからぼくはベーツ先生というのは生涯をかけて成長された人だと思う」と最後に今田がまとめている(『ベーツ先生思い出座談会』『母校通信』第三一号、一九六四年五月、三六頁)。

(9) 講演自体がいつ行われたかは不明である。しかし、商科会(商業教育の実際化を計り、学生相互の親睦を増進するために)作られた「商科だけの倶楽部」、『関西学院高等商業学部二十年史』一九三一年、一九頁)の会報『商光』に掲載されたことから、その例会で話された可能性が高いのではないだろうか。と言うことは、第一回例会(一九一三年二月二三日)から、『商光』第一号発行(一九一五年二月)までの間とも考えられる。

(10) 高等学部(文科・商科)は一九一二年に開設された。一九一四年九月時点の学生数(高等学部)は一二二人と報告されてゐる(“Report of W. K. Matthews,” *Year Book of the Japan Mission and Minutes of the Annual Meeting of Missionaries of the Methodist Episcopal Church, South*, Sept. 3-8, 1914, p. 15)。『文学部回顧』(一九三二年)によれば、文科の入学生は、第二回四人(一九一二)、第二回五人(一九一三)、第三回五人(一九一四)であったが、すぐに転校した者が多く、一九一四年の授業は三学年併せて八名で行われていた(九一〇頁)。したがって、高等学部の大半は商科生であった。

(11) ベーツが新設の高等学部長に就任した時、関西学院には神学部と普通学部があり、それぞれ独自のモットーを持っていた(神学部「真理將使爾自主」、普通学部「敬神愛人」)。したがって、ベーツが高等学部のために新たなモットーを提唱したのは、いく自然なことであった。なお、“Mastery for Service”がモットーとされた経緯について、先の『二十年史』にはこのように説明されている。「学部的人格主義的教育を学生自らの脳裏に意識せしむるには何か簡單なる標語、警句を選ぶ

のが好いと云ふので、ベーツ部長、木村教授等相計ひつゝに College Motto. として “Mastery for Service.” を College Watch Words. として “Character” & “Efficiency.” を決めた。前者はベーツ部長、後者は木村氏の考案に基づくものである」（一三頁）。“Mastery for Service.” と聖書との関連について、ベーツ自身はヨハネ福音書八章三三節との関連で説明している（『神戸新聞』関西学院創立七十年記念特集、一九五九年一月三日）が、「直接の由来」は「マルコ福音書一〇章四二（三四節）」と考えられる（辻学『奉仕のための練達』一校訓の翻訳をめぐって『商学論究』第五〇巻第一・二号合併号、二〇〇二年二月、七〇五〜七一四頁）。なお、ベーツの母校マギル大学にマクドナルド・カレッジが開設された時（一九〇六年）、同じ言葉がモットーとして制定された。詳細については、池田裕子「ロリニヤルから世界へーカナダ東部におけるベーツ院長関係地訪問ー」（『関西学院史紀要』第一九号、二〇一三年三月二十五日、一二八〜一三四頁）参照のこと。

- (12) Ministers of State. 日本では大臣を指す。“minister” はラテン語で「使用人、召使い」の意（グリニンス・チャントル編『オックスフォード英単語由来大辞典』、澤田治美監訳、柊風社、二〇一五年、六〇五頁）。関西学院が大学を開設した時、初代学長に就任したベーツは関西学院大学のミッシェンを発表した（C. J. L. Bates, “THE MISSION OF K. G. UNIVERSITY,” 『関西学院新聞』大学昇格祝賀号、一九三二年二月二〇日、四頁）。その中で、“education” の意味がラテン語の語源に遡り丁寧に説明されている。“minister” にも同様の説明が加えられていれば、わかりやすかったであろう。若いベーツにそこまでの配慮を求めるのは酷かもしれない。

- (13) ベーツの父親 (J. L. Bates) は、カナダのオンタリオ州ロリニヤル (J. Original) で大理石と御影石を商っていた。したがって、ベーツが墓碑に刻まれた言葉を挙げたのは、その生い立ちを考えると、実に自然なことである。私が二〇一二年夏、調査に訪れた際、同地からヴァンクリーク・ヒル (Vankleek Hill) に向かう道中、墓地が見えた。その墓地の古い墓石の多くはベーツの父の会社によるものだと、歴史協会のルイーズ (Louise Bédard) さんが教えてくださった。しかし、この講演が高等学部商

科の学生に行われたことを考えると、日本人に馴染みの薄い欧米の墓碑銘を例に出したのはいささか不親切である。“You attitude”の姿勢が足りない。日本人学生に理解しやすい例が挙げられていたら、後年、この部分を取り上げ、差別的表現だと指摘する声も出なかったであろう。なお、ベーツ自身は、自分の墓石には、名前のほかに「日本への宣教師一九〇二―一九四〇」と刻んで欲しいと考えていた (Diary of August 1, 1941)。二〇一二年夏、墓参りに訪れた私は、その願いが叶えられてゐることを知った (“CORNELIUS JOHN LIGHTHAL BATES 1877-1963 / MISSIONARY IN JAPAN 1902-1940.” Wolford Cemetery)。

- (14) 広報誌『K. G. TODAY』No. 284 (二〇一四年九月)の「学院探訪」で、このメッセージを紹介した(「生と光と力の拠点」)。

- (15) ベーツのいる院長室は原田の森の中央講堂二階に設けられた(献堂式は一九二二年四月二〇日)。ギャラリーを含め一、六〇〇席を有するだけでなく、院長室、秘書課、礼拝主事室、社交室、食堂を備え、学院行政の中枢機能が集められていた(『関西学院事典』増補改訂版、三三六―三三七頁)。原田の森のキャンパスマップを見ると、講堂は確かにキャンパスの中央に位置している。その命名には、学院行政の中枢機能との意味もあった。そこには、ベーツの最初の任地「中央会堂」(Central Tabernacle)の影響が考えられる。中央会堂は、一八九〇年二月(献堂式は翌年一月三日)、カナダのメソヂスト教会により、東京に建立された。イビー(C. S. Eby, 1845-1925)は中央会堂創立の宣誓書でこう述べている。「…日本は実に東洋の英国、東京はロンドンに比すべき状態にあり。即ち政治は勿論、商業、工芸、社交、教育の如き、皆齊しく東京を以て中心となす之を換言すれば、東京は日本国の手綱を握りて能く国民全体を制御するの位置にありとす。また国家将来の運命を査収するところの有為青年の中心なり。恐らく世界の何處に於ても、斯くの如く大多數の青年男女の遊学する都会は、東京を描いて他に求む可からざるべし。而して当本郷区の位置たるや、更に該中心の又核心に位し、新しき日本を鑄造すべき大工場の用地なりとす…」(『中央会堂五十年史』、

一九四〇年、五八―五九頁）。一九二九年四月、関西学院は上ヶ原に移転した。これらの意味を意識し、新キャンパスの講堂も、「中央講堂」と命名されたのであろう。

(16) この門は、西門（正門）を指す。

(17) 高等商業学部専用校舎ができたのは一九二三年。この時点では本館が使われていた。

(18) ブランチ・メモリアル・チャペルの献堂式は一九〇四年一〇月。

(19) 神学部専用校舎（神学館）は一九二二年竣工。

(20) 一九二二年四月の学生数は一、六六六人だったが、一九二三年度は一、七三一人（中学部八〇〇人、高等商業学部六七七人、文学部一八五人、神学部六九人）で始まったとベーツは報告している（President's Report, April 18, 1923）。

(21) カナディアン・アカデミーは、カナダのメソヂスト教会が宣教師の師弟の教育のために創立した学校である。一九一三年九月一三日、カナディアン・メソヂスト・アカデミーの名で一三名の生徒により始められた。場所は原田の森時代の関西学院のすぐ北であった。生徒数は順調に増加し、関東大震災のあった一九二三年には二四四名になった（Florence Whiting Metcalf, *Sienna Clavis Successus*, Oct. 1998, pp. 2-9）。その後、同校は長峰台に移り、一九九〇年には六甲アイランドに移転した（*ibid.* p. 60）。

(22) 現在の王子神社（神戸市灘区原田通）。祭神は建御名代・若一王子神。明治時代に原田神社と改名したが、一九四六年に王子神社と再び改名した（『兵庫県大百科事典』上巻、一九八三年一〇月一日、三五―頁）。

(23) 一九一二年、原田の森の原生林に射場が作られたのが弓道部の始まりであった。一九二四年四月、関西学院主催第一回全国弓道大会が挙行された時、院長のベーツは、大会会長として開会の挨拶をした。「弓術は昔は世界各國至る處に行はれたもので、中世期の英國の競射は最も有名なものの、一つであつたが久しき以前に無くなつて居り、現在米國にて行はれて居るのは戯に類する。然る

に日本に於ては昔から今日迄最も正しく、又頗る精神的に發達を見た事は世界に其例を見ない。是れ確かに日本の残りとしす可きもの、一つと云ふ可く、私は運動競技として特に推奨する所以である。希くば日本獨特の最も高尚なる此スポーツを永久に保存し、且發展せしめられん事を希望す。…」(米田満『関西学院スポーツ史話』神戸・原田の森篇)、関西学院大学体育会、二〇〇三年六月二〇日、三五五頁)。

- (24) 一九七〇年代に私が中高時代を過ごした学校は青谷(原田の森のすぐ北)にあった。中学一年時の教室は最上階南面にあり、窓からの眺めは、記憶する限り、ベーツがここで述べている通りだった。この一文を目にした時、その光景が鮮やかに蘇った。

- (25) ベーツの言葉「生、光、力」は、この一一年後に制作された校歌「空の翼」(作詞・北原白秋、作曲・山田耕筈)の歌詞「風、光、力」に重なる。「空の翼」と関西学院の校風を検討するため、創立以来の主要な歌(校歌、応援歌等)の歌詞キーワードを網干毅が表にまとめている。その表によると、「空の翼」の前にあった五曲のキーワードは、「Time Power、上ケ原、力、歌へ、新月、自由、自由の鐘なる、真理の光、強き翼、空、月かげ、自由の園」である(ただし、「院長室の窓から」時点の校歌は“Old Kwanser”のみで、そのキーワードは最初の二語)。その上で、「白秋が関西学院を訪れたときには、すでに『自由』や『力』『歌』などの言葉で表されるイメージも本学の校風として定着しており、学院関係者からそういった説明を受けた。さらに上の五曲の楽譜や歌詞資料も提供された。そこでそれらを総合的に検討して白秋は構想を練った」と網干は類推している(網干毅『空の翼』と関西学院の校風『関西学院史紀要』第一五号、二〇〇九年三月二五日、二八―三六頁)。「院長室の窓から」でベーツが述べた思いが徐々に関西学院に浸透して行ったことは、その後作られた三曲の歌詞キーワードからも明らかである。五曲目を担当した白秋は、“Mastery for Service”を加え、院長であるベーツの思いを一層巧みに歌詞に盛り込んだと言えるだろう。

- (26) 広報誌『K. G. TODAY』vol. 260 (二〇一〇年一〇月)の「学院探訪」でのミッションを紹介し

た時(「Launch out into the deep.」(ルカ伝五章四節))、私のもとに多くの声が寄せられた。「時代を超えて今の関学と重なり、ベーツ先生から励まされた思いがする」「ベーツ先生のミッションは決して古くなっていない。現在にも通用する」「ベーツ先生のミッションには説得力がある」「このようなミッションを示してくれる人となら、新しい未来に漕ぎ出していけると思う」「ベーツ院長の志を今に読みこなし、その上で表現を練り直そうという人が現れることを期待する」「効率だけを追い求める昨今の流れの中で、最も大切なことを見つめ直す必要がある」等々。

- (27) 一九三二年に予科、一九三四年に法文学部と商経学部が開設された。大学完成年次の関西学院全体の学生数は、定員二、九〇〇名(法文学部二四〇、商経学部三六〇、予科四〇〇、神学部六〇、文学部二四〇、高等商業学校六〇〇、中学部一、〇〇〇)に対し、二、九六五名(法文学部二四〇、商経学部四〇二、予科四三一、神学部五五、文学部二二二、高等商業学校六〇九、中学部一、〇〇六)であった(President's Report, May 9, 1934, April 6, 1936)。

- (28) 関西学院で初めて大学開設の話が出たのは、一九一四年四月の理事会だった(Minutes of the Board of Directors, April 22, 1914)。一九一八年に大学令が制定され、官立の単科大学や公立・私立の単科大学が公認されるようになると、高等学部学生会が大学昇格運動に取り組み始めた。結局、関西学院が予科を開設したのは、慶應義塾、早稲田、同志社等から一二年遅れであった。

- (29) 関西学院は一八八九年に神学部と普通学部で始まった。普通学部(普通科)が中学校令に準拠する学校と認められ、中学部への改称が認可されたのは一九一五年であった。関西学院創立から二三年後の一九一二年に開設された高等学部(文科・商科)は、一九二二年に文学部、高等商業学部となった。一九三二年は高等学部開設から二〇年目に当たっていた。

- (30) "Launch out into the deep." ルカ福音書五章四節。ベーンは King James Version の聖書を使用している。

- (31) 詳細は、辻学『奉仕のための練達』登場と時局的判断『学院史編纂室便り』第一七号、二〇〇八

年六月六日、一〜四頁。

- (32) ベーツの離日前、文学部（専門部）はレコードを制作している（「ベーツ博士記念朗読 Farewell Readings by Dr. C. J. L. Bates」）。ベーツが朗読したのは、ヨハネ福音書三章一〜八節と一六節、テニスの「砂州を越えつ」（Crossing the Bar）であった。